

# 「VR認知症体験」が新しい社会をつくる

株式会社シルバークラウド 下河原忠道さん

認知症をバーチャルリアリティで体験できるVR認知症体験は、昨年から実施されていますが、少しずつ話題となり今や体験希望が後を絶たないそうです。今回は、8月に認知症カフェ「ラウレア」で開催された「VR認知症体験会」に参加し、実際に体験した後、その開発者である下河原忠道さんのお話をお聞きました。

## 介護職員さんの「さあ、大丈夫ですよ！」が怖かった

体験会では、参加者それぞれがゴーグル型のVR端末とヘッドホンを装着します。そして、立ち上がりつつスイッチを入れるとそこは360度広がる別世界となります。

気がつくとい自分はビルの屋上にいて下を見えていました。手すりのない屋上の端に立っているのが実際に足がすくむの感じます。左を見ると人がいて、ほほ笑みながら「降りてください」と言っている。右側にも人がいてニコニコしている。そして、丁寧な口調で「さあ、大丈夫ですよ」と言う。「降りて、降りられるわけじゃないでしょう!」「大丈夫よって、全然大丈夫でないでしょう!」と心で叫ぶと、それでもしつこく「さあ、降りてください」と言いつつ手を引く。ああ、落ちるう。



すると、画面が変わって老人ホームの前。そこには出迎えの人たちがいて「お帰りなさい」と言いつつニコニコしている。後ろを見ると車がある。どうもビルの屋上かと思っていたのは、車のサイドステップだったようだ。クルマとビルを勘違いしていたのか。それにしても怖かった!死ぬかと思った!

この体験は、視空間の認知障害の事例だそうです。少しオーバーに作ってあると言われましたが、例えば車から降りることが、こんな風に見えたり感じたりするなんて、それまで思いもしませんでした。ビルの屋上で「大

## VRで体験するのは、認知症の実質的体験

認知症の症状は、脳の細胞が壊れることによって直接起こる症状である「中核症状」と、中核症状に本人の性格、環境、人間関係などの要因が絡み合っ起こる「行動・心理症状」に分けられますが、一般に認知症として映像などでよく紹介されるのは、ほとんどが後者の「行動・心理症状」で、徘徊、暴言などの第三者のお困りごとばかりです。

でも本来、認知症のある人が何に困っているのか、何が原因でそのような行動をとるのかを知るためには「中核症状」について理解

しないといけません。しかし、中核症状は、認知症の人しか自覚できないので、なかなか理解できない。そんな中で、VR認知症体験は、認知症の人たちからの詳細な聞き取りを基に、その中核症状を一人称で体験できるようにしたものです。

## 認知症が悪いのではない。認知症のある人や家族が生きづらい社会が問題

なぜVR認知症体験を開発したかと言うと、私は高齢者住宅を運営しているのですが、ここでは認知症の人と地域の人々が接触を持ち、みんなで楽しく過ごしています。例えばイベントをやると認知症の人も準備から運営まで関わってもらいます。認知症の人も役割とか生きがいがあると身体が動くんです。もし、認知症のある人と地域の人を断絶してしまっ

たら、このおじいちゃんたちは不幸でしょう。でも、もっと不幸なのは、子供たちです。たくさんいる認知症の人が楽しく生活していることを全く知らずに大人になってしまいうんです。元気な認知症の人を見て、認知症になっても大丈夫なんだなと思ってもらいたい。そんな社会になつてもらいたいと思っているからです。

今、社会では認知症のある人を地域の人と分離して、結果、認知症に対するネガティブなイメージや偏見が生まれています。認知症についての情報は、「認知症になつたらおしまい」「認知症にならないためには」といったもので溢れています。そしてそれが、認知症になつても元気に暮らそうとしている人や家族を生きづらくしています。認知症が悪いのではありません。認知症を取り巻く社会の心理環境が問題なのです。私は、そんな社会をVR認知症体験で変えていきたいと思っています。「認知症になつても大丈夫だよ」と言っている人っていないんですよね。私はそういう立場に立つて認知症の人を応援したい。

## 認知症の人に対して想像力を持って接する。そんな社会をつくりたい。

認知症の症状は、100人いたら100通りです。それぞれに個性があつて人生があります。VR認知症体験をしたからもう認知症の人の気持ちが分かつた、といったら、そう

大丈夫!」と言っていた人は、今思えば介護職員さんだったのでしょうが、その丁寧な言葉が逆に怖かったです。これが、VR認知症体験なんだ。参加者は皆、思いもしなかった体験にただ驚くばかりでした。他にも、「ここはどこ」編、「レビュー小

体病幻視」編も体験しましたが、終了後には、認知症の人に対する見方が確実に変わっていました。

以下、このVR認知症体験について、下河原さんのお話されたことをご紹介します。

ではありません。あくまで、認知症のある人はこう見えているかも知れないという想像力を養うのが、このテクノロジーの使い方です。認知症と言え、一般に重症のイメージが先行していますが、それは偏見です。実際には軽症から重症までグラデーションがあります。そのような人に対して、何が困っているのかを想像力をもって接することが大事なんです。困っている人を見かけたとき、もしかしら、この人は認知症のある人かもしれないと誰もが想像力を持って接することができれば、認知症のある人にとって生きやすい社会に変わる一助になると思います。

徘徊で何人もいなくなつちゃうなんて、おかしな話だと思いませんか。大丈夫ならそれでいいから、軽く声をかける。それが今必要な時代だと思います。おじいちゃんが一人で歩いていたら「おお、大丈夫?どこ行くの?」たったそれだけで、世の中だいぶ変わっていくのではないのでしょうか。

最後に、相手に対し想像力を持つて接することは、実は認知症だけでなく生活のさまざまな場面で大切なことです。それを認知症の人が教えてくれているのだと私は思います。

下河原忠道さん

株式会社シルバークラウド代表取締役  
サービス付き高齢者向け住宅「銀木庵きんもくせい」運営  
財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会理事

